

「広場」を核にした、歩きたくなるまちづくり

— 富山「グランドプラザ」はなぜ成功したか

インタビュー

山下裕子

「ひと・ネットワーククリエイター」/ 広場ニスト



脇坂敦史 | 取材・執筆
宮村政徳 | 撮影

山下氏が「ファン」だと語る、兵庫姫路路大手前通りにて撮影。

道行く人々が自然に集まってしまう場所である「広場」は、ウォーカーブルなまちづくりに欠かせない要素のひとつ。では一体、何が広場を広場たらしめるのか？ そして、よい広場とはどんな場所なのか？ 2007年に富山市の中心市街地に整備された全天候型の屋外広場である「グランドプラザ（愛称）」は、公共空間としては異例の稼働率を実現し、同市が掲げる「コンパクトシティ」推進にも大きな役割を果たしている。開業以前からこの広場の準備・運営に関わり、現在は「広場ニスト」として全国のまちづくりを支援している山下裕子氏に、グランドプラザ成功の理由と居心地のよい広場の条件を教えてもらった。

富山駅に近い中心街、アーケードの通りが縦横に巡る一角に、天井と側面をガラスで包み込むようにおとした明るい空間があり、通りかかる人は曇り空からいきなり日が差し込んだような解放感を覚える。そこここに緑の木々が植わったプランターがあり、見上げると壁面には巨大なモニターが。ここは広い道なのか、それとも建物の内部なのか。他とは違うと感じるものの、すぐには「広場」とは気づかないだろう。そんな感想を伝えると、山下氏は嬉しそうに笑ってくれた。

「その何気ない感じ、いい意味での存在感の希薄さがグランドプラザの特徴なんです。設計された浅石優「*1」さんも、空間そのものより、

歩いたり立ち止まったりする人のアクティビティが主役となる、そんな美しい広場をつくりたいと考えたとおっしゃいます」

特殊工法を駆使し、高さや軽さを強調した屋根は、建築業界でもなかなか「建築物」として評価されなかったとか。法令的にも火気の使用を可能にするなど自由度を高めるため、あくまで「屋外空間」として整備する工夫を随所に凝らしている。

「浅石さんは、現場責任者だった富山市都市整備部の京田憲明「*2」さんが、いわゆる建築の専門家ではなくてよかった（ランドスケープが専門）と語っています。おふたりは建築の常識や

役所内の縦割り組織に縛られず、理想とする広場実現へ、あらゆる調整を行ったと聞いています」

たしかに広場は、すぐれた建築設計のみで実現するようなものではない。では、富山市が掲げた理想とは何だったのか？ どんな人たちが何をするかで、グランドプラザは「理想の広場」となり得たのだろうか？

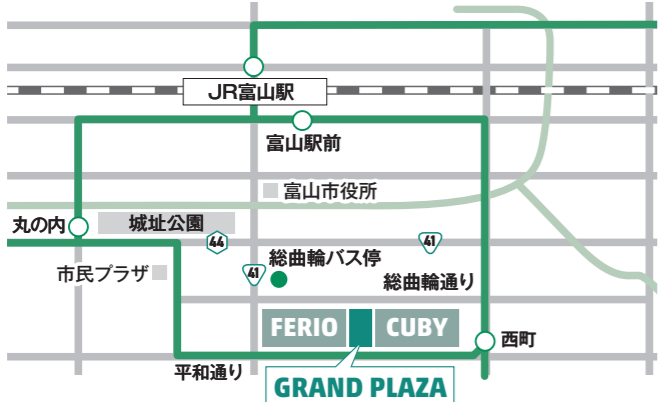
人々が通る一等地を広場に まちの賑わいをつくり出す

最も基本的な要素としては、グランドプラザの立地のよきがあげられるだろう。古くから富

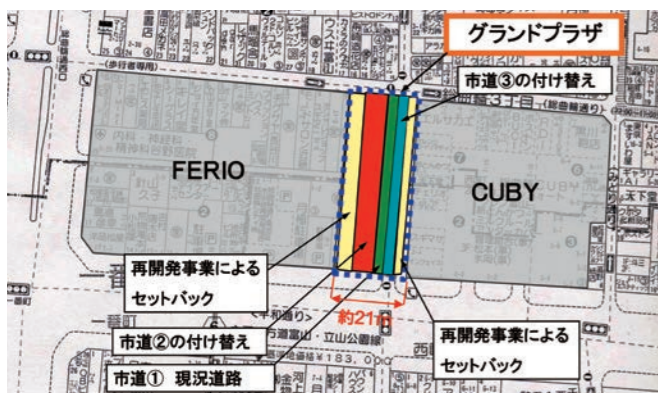
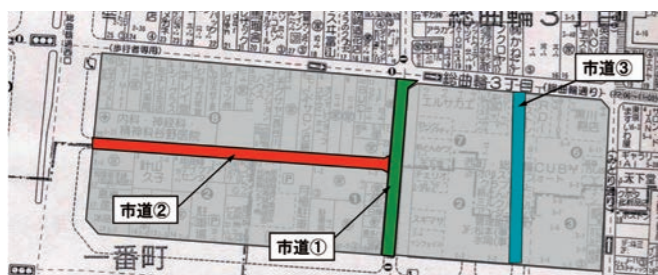


路面電車の通る平和通り側から見た、グランドプラザ全景。天井までの高さ19m、敷地面積約1,400㎡、催事の規模に応じて半面から1/5面までの使用が可能。写真提供/富山市民プラザ

■ 図1: 「グランドプラザ」の所在地 グリーンは路面電車



■ 図2: 市道の集約とセットバックにより生まれた広場



提供/富山市民プラザ

「この部分は再開発前の市道を集約した土地で（図2）、FERIO内の百貨店のバックヤード機能を担う荷下ろし場となる予定でした。それ

山市の賑わいの中心であった「総曲輪」「*3」の市街地再開発事業として整備されたこの「まちなか広場」は、JR富山駅の南に延びる目抜き通り沿いの複合商業施設「FERIO」と、駐車場などの入った「CUBY」の間にある（図1）。もし、駐車場ビルと広場の位置関係が逆だったら、今のような広場の賑わいは生まれ難かっただろうと山下氏は指摘する。広場をつくらば人が集まるのではなく、人が通るところを広場にすることが大切なのだ。

■ 図3：富山市が掲げる「お団子と串」の都市構造

串：一定水準以上のサービスレベルの公共交通
お団子：串で結ばれた徒歩圏



凡例
● 鉄道・路面電車
バスサービス
● 鉄道サービス
● バスサービス
● 都心
● 地域生活拠点
出所／富山市資料



上／高さを0～1mまで設定できる昇降式舞台の下には、貸し出し機材を収める地下収納庫がある。下／重さ約3tの「モバイルグリーン」は、人力で移動が可能。写真提供／富山市民プラザ

を聞き、『もったいない』と屋根付き広場を提案されたのが、当時、国土交通省から市の助役にお迎えし、後に国土交通省の技術審議官も務めた望月明彦さんです。『旅の人（県外の人）』ならではの感性で、『道にして広場、歩くのもくつろぐのも自由』という斬新な発想によって、人々は初めて広場づくりを意識しました」

もちろん、賑わいを生み出す「まちなか」の大切さは、当時すでに多くの富山市民が切実に感じていた。早くから自動車への過度な依存によるスプロール「*4」が顕著だった富山市では、2007年に「コンパクトなまちづくり」を目標に掲げた「中心市街地活性化基本計画」を策定し、全国第1号として国の認定を受けた。「公共交通の利便性の向上」「賑わい拠点の創出」「まちなか居住の推進」を3つの柱とした27の事業を進め、グランドプラザの整備事業もそのひとつとなった。

富山市が目指すコンパクトシティは、中心市

「富山市がすごかったと思うのは、市役所の方たちが私のような人間を内部に入れることで、イベントを企画・運営する人脈をはじめ、そのノウハウや経験、視点といったものをまるごと取り込んでしまったことです。ふだんの打ち合わせにしても、ふつうなら民間である私たちが役所に出かけていくところを、担当の皆さんが現場に近い事務局へ気軽に足を運んでくださるので、話もアイデアもはずみました」

その象徴といえるのが広場の一角に設けられた、ステージとしても活用できる昇降式の地下収納庫だろう。イベント時に使う多数の椅子やテーブルをはじめ、さまざまな貸し出し機材を収めるこのスペースは、山下氏らの「設営の際に倉庫が遠いのは本当に困る」という利用者としての切実な声がみごとに反映されたもの。また、ユニークなのはホバークラフトの原理によって移動しやすい大型の樹木プランター「モバイルグリーン」で、利活用時に使い勝手のよい空間と平常時の心地よい緑の演出を両立する。このように機能面を重視する姿勢は、広場利用の申請方法や料金体系などの運営面でも一貫しており、メールによる申請での仮予約、リーズナブルな半面使用が可能な点も好評だ。

「人のいる景色」をつくって ただの空間を「広場」にする

むろん、完成した空間がすぐ広場になるわけではない。グランドプラザの場合も、完成後に

街地を取り巻くすべての地域を等しく活性化しようとする「同心円型」のまちづくりではなく、公共交通で域内の複数の拠点をつなぐ「お団子と串」の発想で知られる(図3)。人々の移動手段(足)と賑わい(楽しさ)を一体化した形で中心市街地の価値を高め、税収も高めることで持続可能な都市へ――前市長の森雅志「*5」氏が積極的にタウンミーティングで市民に訴えていた姿を、山下氏は鮮明に覚えている。

「富山の人はすごく賢い。だから当時は、中心市街地への投資が都市経営に必要であるということが、商店街の方も郊外の住民の方にも、役所のさまざまな部の方にも、共通理解として自ずと広がっていききました」

こうして認められたグランドプラザの事業費は15・2億円。1400㎡の屋外広場としては、贅沢だと言えるだろう。一方で山下氏も指摘するように、同じ広さの土地に8階建てのビルを建てようと思えば、不足が生じる額でもある。

本当の「広場づくり」が始まったという。

「治安のよい富山市では、憩いのためのテーブルや椅子を置きっぱなしにすることへの異論は当初からありませんでした。でも、ただテーブルと椅子を置いただけでは、真面目で働き者の富山市民は誰も座ってくれないですね」

人の集まる広場をつくろうとするなら、まず運営の当事者が積極的にそこに座るようにしてほしいと山下氏は言う。それは、いわば広場の使い方の「範を示す」ことになる。スタッフが広場に出てパソコンで仕事をしてもいいし、お昼にお弁当を食べてもいい――。

「人は人が大好きなので、人がいれば人が寄ってくる。なので、まず人のいる景色をつくるのが大切です」

率先して広場の使い方を見せるという意味で、もうひとつ印象的なのは駐輪自転車への対処だ。駐車場の入ったビルの1階には地権者の商店が並び、グランドプラザは今も「道路」であり「商店街」であるという性格をもっている。そのため、店を訪れる客が1台自転車を置けば、あつという間に数台の自転車そこに並んでしまう。山下氏らは、商業施設側の地下にある駐輪場の利用を毎日のように呼びかけた。

山下氏自身も「当初は、自転車の誘導が仕事みたいでしたね」と苦笑いするが、これを注意や禁止ではなく、店主や利用者へのお願いという形で続けた結果、ここがどんな場所であり、どう振る舞うべきなのかとの「共通理解」が少

だからこそ問題は、そこに生まれた贅沢な空間で何を起こせるかにかかってくる。

「私の広場」という意識が育んだ きめ細かな工夫と自由な運営

グランドプラザの成功を語るうえで欠かせないのは、完成の3年も前の2004年から、市役所が主体で、市民とも協力してその利活用を考える「活用委員会」を立ち上げたこと。これによって、当初からハードとソフト一体による「私の広場」という意識が育まれた。

当時、富山市で演奏会や展示会といったイベントの企画・運営に携わっていた山下氏が市民代表として広場と関わることになったのも、この活用委員会に誘われたのがきっかけ。年齢や立場を超え、気軽に本音で話し合える場のあったことが、その後の自由な広場の運営「*6」だけでなく、いくつもの具体的なアイデアとして後の広場を形成する核となったという。

しずつ生まれてきたという。広場の使用においては禁止事項をなくし、できるかぎり制限をなくすというのが大きな方針でもあった。

そしてもちろん、人が集まる景色をつくるにはイベントの開催も欠かせない。広場の運営で特に力を入れたのが、土日や祝日のイベント開催を切れ目なく継続すること。そのため、山下氏自身が過去に培ってきた人脈だけでなく、各地で「何か事を起こしている人」を探しては懸命に呼びかけた。さらには、未来への投資として自主事業で子ども向けを中心に多数企画し、今では中心市街地の恒例行事になっている。

グランドプラザで毎日のように見られる現在の賑わいは、こうした努力を2年、3年と続けてきた成果だ。人々はここを通りかかると、その多くがリラックスし、歩をゆるめ、自然にテーブルや椅子を利用してくつろいでいる。今、この場所で自然に誘発されている人々の行動こそ、こうした地道な「広場づくり」そのものの継続でもあることに気づかされた。

コンパクトシティの中心として 循環と賑わいを生み出す場

2009年末に広場の前を通る富山地方鉄道の市内電車(環状線)が開通した。コンパクトシティを掲げる富山にとって、それは画期的な瞬間だったろう。

その名も「グランドプラザ前」停留場ができたのを機に、従来の車中心の社会に「歩く」と



上／フランス風蚤の市の「CoCo Marche.」は大人気。下／結婚式場として使われることも。写真提供／富山市民プラザ

いう選択肢が生まれる。市民がウォーカーなまちの楽しさを実感するにつれ、おのずと認知度の上がった広場はコンパクトシティの中心として、人々が滞留することで回遊性を高める強力な「ポンプ」になっていく。グランドプラザはそれ単体ではなく市の交通政策とセットで構想されたことで、より大きな成果を發揮しているのだ。ばらばらの拠点を場当たりのつくくるのではなく、こうした大きな視点で人の流れを考えることが、ウォーカーなまちづくりには欠かせないと思いたった。

では、充実した公共交通網と中心広場の存在は、実際に富山のまちをどう変えたのか。

市内電車とともに各地域をつなぐバスが交差し、交通の重要な結節点のひとつである「グランドプラザ前」を通りかかった人は、毎日のように広場で楽しそうなイベントが開催されているのを目にする。あるいは、何も行われていないのでも、子どもたちが楽しそうに駆け回っているのを目にする。あるいは、何も行われていないのでも、子どもたちが楽しそうに駆け回っているのを目にする。

こうした条例を可能にしたのも、地域の人間関係が土台にあったからでしょう

そんななかで、グランドプラザの実現に市役所が果たした役割は大きい。たとえば、再開発の土地に元からあった3つの道路が、すべて市道だったことも有利に働いたとは言えないか。

「あるかもしれません。重要なのは、やはり主役となる市町村などの基礎自治体です。今、全国でお仕事をさせていただいていますが、役所に元気な課長さん、係長さんがいるところは面白いことを起こせていると感じます。その人の能力という属人的な話ではなく、地元にある人間関係や制度、仕組みとどう向き合い、解釈するかが重要なのだと思います。これまでやられていない新しいことの多くは白と黒の間、グレーな領域にあると考えればなおさらです」

広場は、孤立、高齢、不安など、さまざまな理由で家にいられない人がやってくる場所でもあり、福祉面においても重要な意味をもっている。すべての人に開かれた広場の公共性をあらためて考えるにつけ、基礎自治体の本気度が問われると痛感するばかりだ。

用がなくても歩きたくなるまちへ 広場は「ついで」に寄るところ

2014年からは「広場ニスト」として全国の「まちなか広場づくり」の伴走的な立ち位置で活動を続ける山下氏。国が用意するウォーカーに関する新制度なども利用しながら、そ

たり、さまざまな人々がくつろいでいる光景を身近に感じていく。

「かつての富山市は典型的な車社会で、私自身も重度のマイカー依存者でしたが、この仕事をするようになってまちなかに暮らすなかで、大きく考えが変わりました。たとえば富山駅にお客さんが来るとして、どうやって迎えに行くか？ 歩くこともできるし、シェアサイクルに乗ることもできるし、市電やバスを使うこともできる。選択肢を思い浮かべられるのは、都市の豊かさそのものだと思いたったんです」

山下氏が広場づくりに励んでいた07～09年頃を境に、富山市はたしかに新たな方向性へ向けて変わりはじめた。路面電車の利用者数、中心市街地の歩行者通行量、居住人口といった統計にも、それはしつかり反映されている。

「市民へのアンケートを見ても、以前はまちなかに出かけるのは月に一度くらいだったのが、今は1週間に一度に増えているといった結果が出ています。これまで都市開発は、買い物を中心とする『用をつくろう』と躍起になってきた。広場は逆に『用はない』けれど、あそこに行けば何かやっているかもという形で来街に関する期待感を高めているのかもしれない」

制度の余白やグレーゾーンを プラスに転じる自治体の姿勢

こうして完成し、賑わいの中心として認知、活用されたグランドプラザの空間だが、そこに

それぞれの人口規模や地域の実情に合った広場的な空間をつくることは可能だと強調する。でも、そもそも広場とはどんな空間であり、どうやってつくるべきものなのだろうか？

それは「マニュアル通りにつくれば人が集まる、というようなものではない」と山下氏は言う。広場は目的的地ではない——それがイベントの開催を仕事にしていた頃から、一貫して「場づくり」を続けてきた氏の持論だ。広場は、ついでに寄るところ、ついでの行動を誘発する場所であり、それゆえ立地が何より大切となる。

「思いがけない出会い、巡り合わせが生まれるのも広場です。そういう『ついで行動』や『休息』、『一服』が豊かになった先に、用がなくても行きたくなる広場ができると思います」

そうした発想に立つだけに「広場ニスト」としての提案も、新たな広場を一からつくるより、すでに空いている場を使うという考えに傾く。なかでも広場的な空間と親和性が高いのはマーケット（市場）、つまり商業活動だと指摘する。

「生鮮食料品を売るだけの市場ではなく、いわばマーケットングもスタートアップも含めたマーケット。地元の老舗から近所のお婆ちゃんまでが商売をし、お喋りし、往來を眺めて日なたぼっこする。たとえば青森県八戸市の『日本最大級のカオス』と自称している朝市では、アワビやウニから中古車まで何でも売って、誰もが集まれる。市場でなくても、たとえば往來に立つポストやバス停だっていい、広場的な空間

は関わる人々にとって非常に複雑な意味や文脈が隠されている、と山下氏は言う。

たとえば、広場は元の市道と建物をセットバックさせた空地からなり、ガラス屋根の下には広場をまたいで建物をつなぐ上空通路が2本ある。いずれも、実現には道路利用や建築関連の法令の高度な解釈が不可欠なうえ、グランドプラザ、商業施設、駐車場のビルは、主体となる事業者も設計者も建設業者もすべて別々だ。そこには当然、さまざまなハードルがあったに違いない。事実、視察などで他の地域から来た自治体担当者を何より驚かせるのは、市がつくったガラス屋根の片側（商業施設側）に柱がなく、その部分の加重を民間のビルが支えているという点だという。なぜ、そんなことが可能だったのかという問いに、山下氏は「よい人間関係がベースにあったから」と即答してくれた。「地方都市ならではのかもしれませんが、それぞれの代表が学校の同級生や友人のような関係にあったことで、信頼や対話が一对一の人間同士でできる状態だったことが大きかったと思います。今でこそ国の制度もだいぶ変わりましたが、あの当時は道路にせよ公園にせよ法的な制約が多く、使い勝手が悪かった。そのため市は07年に『まちなか賑わい広場条例』を定め、賑わい広場づくりに際しての道路交通法の制限などをはずしました。この条例がユニークで、よく『余白だらけ』とも評されます。つまり、細部は関係者が話し合って決めることができる——

をつくる拠り所が必要なんだと思います」

拠り所は、さまざまでもいいのかもしれない。一对一の人間関係こそが起点であり、それをつなぐ役割を担うのが「広場」なのだ。今、全国の水辺や空き地、街路、公園、駅前やバス停前の広場を活用したユニークな実証実験が行われている。新しい体験、人間関係が「つぎとつ」ながっていき、特に用がなくても歩いて出かけたくなるウォーカーなまち。それを生み出す道と広場は、意外なほど私たちの日常的な行動と直結しているのだ。

注

- *1 建築家、東京都立大学（旧武蔵工業大学）都市生活学部教授、日本設計プリンシパルデザイナー。
- *2 富山市生まれ。中心市街地活性化推進室や都市整備部を中心に富山市政に携わる。退職後、現在は複合施設富山市民プラザの代表取締役社長。
- *3 富山市中心部にある県内最大の繁華街。町名の由来は富山城の外堀が「曲輪（くるわ）」と呼ばれていたことか。
- *4 無秩序に市街地開発が拡大すること。
- *5 富山市生まれ。2002年、旧富山市長選挙に当選。05年、7市町村合併による富山市の市長選挙に当選後、市長職を5期（旧富山市含む）務める。21年退任。
- *6 公設民営方式で、3年間の富山市による重畳後、指定管理者制度により現在はまちづくりやまが運営。



山下裕子（よました・ゆうこ）

ひと・ネットワーククリエイター／広場ニスト。2007年よりグランドプラザ運営事務所勤務。09年（財）現・財）地域活性化センター第21期全国地域リーダー養成塾修了。11年よりNPO法人GPPネットワーク理事。13年より全国まちなか広場研究会理事。14年より、まちづくりの地元の伴走者の立ち位置で活動を続ける。著書は、『にぎわいの場』富山グランドプラザ「稼働率100%の公共空間のつくり方」（学芸出版社）、「生きた景観マネジメント」（共著・鹿島出版会）、「コンパクトシティのアーバニズム」（共著・東京大学出版会）など。